

図書館とは何か — 辞書を読んで考える

愛知大学名誉教授 高橋 秀雄



図書館とは何か。「図書館」という語を、辞書はどのように説明しているだろうか。手元の『広辞苑』（第4版、1994）を引いてみる。

図書館：(library) (明治中期の訳語。それまでズシヨカンといった) 図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人の利用に供する施設。

文句のつけようのない周到な定義である。しかしこれは、私たちの社会にすでに確立した、いわば制度としての図書館を説明した語義にすぎない、とも言える。私が抱いた「図書館とは何か」というテーマを考えるには、この説明ではすこし物足りない。私の関心は、図書館の不思議さにある。だれでも自由に入ることができ、収集された無数の本をタダで貸してくれて、広々とした明るい部屋の、立派な机、椅子に席を占めて、ゆっくり読むことができる、

このような施設が生み出されたのは、一体いかなる思想によるものか。私たちの生活のなかで図書館はどのような意味をもつのか。そういうことを私は考えたいのだ。

そこでこんどは、『広辞苑』と同じくらいの大きさの、一冊もののフランス語辞典『プチ・ロベール』Le Petit Robert, 1984を引いてみる。フランス語では図書館はbibliothèqueというが、その第一の意味は「本箱、書架」で、2番目には「図書室、図書館」の意味が出てくる。その部分の全文と訳を掲げる。

Salle, édifice où sont classés des livres, pour la lecture. *Travailler dans sa bibliothèque.* **V. Bureau, cabinet, librairie** (vx.) *Bibliothèque municipale, universitaire. Une bibliothèque de prêt. La bibliothèque nationale* (la Nationale). – *Un rat de bibliothèque*, se dit d'une personne qui passe tout son temps à compulsurer des livres, à fouiller dans les bibliothèques. **V. Érudit, chercheur.**

読書のための、本が分類されている部屋、建物。

「自分の図書室で仕事をする」。(関連語) オフィス、小部屋、書斎(古)。「市立図書館、大学図書館」「貸し出し図書館」「国立図書館」—「図書館のネズミ」本の渉猟、図書館の探索に自分の全時間を過ごす人のこと。(関連語) 博識、探求者。

語義は基本的には『広辞苑』のそれと内容は同じであるが、フランス語のbibliothèqueという語が多義的であることによってでもあろうか、記述・構成の仕方には大きな違いがあるようだ。試みに『プチ・ロベール』と『広辞苑』の語義の部分における、対応する語を並べてみると、それぞれ、「本」は「図書・記録その他の資料」、「分類」は「収集・整理・保管」、「読書のための」は「必要とする人の利用に供する」、「部屋、建物」は「施設」となっている。比較してはじめて気づかれるのは、『広辞苑』はここではすこしおしゃべりが過ぎるのではなかろうか、ということである。ロラン・バルトは「辞書ほど饒舌でないものがあろうか」と言っているが、寡黙であることが、逆説的だが、辞書の鉄則である。必要なことはすべて言わなければならないが、余計なことは一切言ってはならない。さもないと、辞書の読者は想像力を羽ばたかせることができない。

『プチ・ロベール』の記述をたどってみると、図書館、図書室はまず、本が分類されて置かれている場所であり、それは本を読むためのものである。この語義を受けて、「自分の図書室で仕事をする」という用例が出される。つまり、それはなによりもまず、個人が本を読む場所なのだ。しかし、もちろん、図書館は個人のものであるというよりも、むしろ公のものである。その連想がはたらいて、「市立図書館」「大学図書館」などの用例が掲げられる。このように、この辞書は語の基本的な意味が何かを、それがどのように使われているかを具体的にしながら、読者とともに考えて行く構成になっている。

『プチ・ロベール』の記述をゆっくり眺めな

がら、私は自分のうちにしだいに考えが広がり、図書館の不思議の核心に近づいたような気がしてきた。つまり、図書館は個人のものであると同時に公のもの、つまり社会のものである、それはそのとおりだが、図書館がもつその個人性、社会性には、他のなにものにも見られない特質があるのではないか、なによりも、そこには義務とか強制というのがまったくない、図書館の本質は、その自由にあるのではないか、ということである。

豊橋校舎の大学図書館は大学のなかでいちばん便利な場所にある。毎日登校してくる学生はいやでもその前を通るようになってきているが、かならずそこに入らなければならないという規則はない。4年間一度も図書館に入らなくても、卒業することはできる。それでも、図書館は、在学中も、卒業してからも、入ってくる学生があれば彼らを、いつでも快く迎え、彼らが原則として世界中の本を利用できるように準備して、待っている。

図書館のことを考えると、その書棚に分類して並べられ、私たちが自由に引き出して読める、その本とは一体何か、そして、本を読むとは何か、を考えずにはいられない。私は、本のことを一から考えようとして、モンテーニュ(1533-1592)の著書『エッセー』の第3巻第3章「三種の交わりについて」を読み返してみた。「三種の交わり」とは、第一は人との、第二は美しい女性との、第三は本との、コミュニケーションのことである。

モンテーニュの生涯のテーマは、自分を研究することだ。彼にとっては、自分のなかに世界がある、自分をみつめることが人間を、社会を考えることなのだ。だから、彼の精神はつねに沸き立つように活発に動いている。本は考えを進めるためでなく、精神の激しい動きを静めるために読むと言っているほどである。そして彼にとって考えるとは、なによりも、現実の人と向き合っ、コミュニケーションをとることである。「私の精神は、新しい

考えに遭遇すると動き出し、あらゆる方向にその活力をあらわして活動を始め、それがときには力に向かい、ときには秩序と美に向かう。こうして、精神は自分を整え、抑え、強くする」。ここには、友人と真剣に議論するモンテニユの姿がよく表れている。しかし、友人との幸福な出会いはまれである。モンテニユにとって本を読むとは、古今の世界の人との、また自分との（彼にとって、自分が書いた文章も終生読み返す対象であった）、最も確実なコミュニケーションの機会であった。生身

の人間とのコミュニケーションに対する強い思いがあるだけに、彼の本に向き合う姿勢はますますいっそう真剣になったことだろう。

私は今、図書館の自由が脅かされている状況を私たちは自覚しなければならない、と思っている。図書館の危機は、今にはじまったことではないかもしれないが、それは焚書坑儒のようにあからさまにではなく、私たちの生活におけるコミュニケーションの困難という形をとって静かに進行している。